



# 長野大学 地域づくり総合センター ニュース 2023



公立大学法人  
**長野大学**  
NAGANO UNIVERSITY

# 01

## 学生のアイデア満載 企業と連携して新商品を開発

### どんな活動？

企業情報学部森俊也教授（経営学）のゼミでは、成熟期にある企業の問題解決を「理論的研究 + 実践的研究」により行っており、これまでも地元のホテルや結婚式場、食品メーカーと連携して新たな商品・サービスを生み出してきました。

2022年度からは、新商品のアイデアを求めている調理食品製造の「株式会社はやしや」の相談を受けた「松本ものづくり産業支援センター」「長野県産業振興機構」から、本学に打診があったことがきっかけとなり、新商品の開発プロジェクトに取り組んできました。

学生たちは6班に分かれて、ゼミで学んだ理論的な視点から「企業の抱える課題」「ありたい姿」「目標」等の設定を行ったうえで新商品の提案を行いました。提案に至るまでの過程では、実際に同社の商品を購入して食べてみたり、提案しようとしている新商品のニーズ調査を実施してみたりと入念な準備が行われました。

2024年4月には、学生たちが提案した中から「炊き込みご飯セット」が発売される予定です。



### プロジェクトに参加している学生のコメント



「炊き込みご飯セット」を  
提案したグループのリーダー  
中島遥さん  
(企業情報学部3年)

私たちのグループが提案した炊き込みご飯セットは、「驚きと愛情いっぱいの食を」がコンセプトです。具材のパックが2袋、出汁のパックが2袋で1つのセットになっており、購入したお客様が好きな組み合わせで、ひと手間かけた炊き込みご飯を作ることができるようになっています。

大切にしたのは、企業がこれまで積み上げてきた強みや特性を活かした商品を提案することです。実はこのポイントに気づいたのは、最終プレゼンテーションの1週間前でした。それまでの提案は私たちの考えた高い理想を押し付けるような面があり、直前ではありましたが、改めて「はやしや」の強みや特性について、メンバー全員で議論することにしました。結果として、類似商品を取り扱う他社とは異なる商品の提案にたどり着くことができました。

今回プロジェクトでリーダーを務めた経験は貴重なものになりました。学生生活の中や将来社会人になってからも、人に寄り添って考え行動できる人になっていきたいと思います。

## 「ボランティア情報センター」って何？

ボランティア情報センターでは、学生が主体となり、学生のボランティア活動のサポートをしています。

2023年7月に発足し、ボランティア活動を紹介するイベントを実施したり、大学の5号館1階にあるボランティア情報センターで、日常的にボランティアに関する相談を受け付けて必要な機関に繋げたりと、ボランティアへのハードルを下げ、学生がよりボランティアに参加しやすい環境づくりを行っています。

また、実際にボランティアへの参加もしています。子どもたちの学習支援や子ども食堂のお手伝い、地域活性化を目的としたイベントのスタッフなど多岐に渡り、時には企画段階から参加することもあります。

## 2023年度は主にこんな活動をしました！

## ●ボランティア情報センターとしての活動

新型コロナウイルス感染症の拡大により、ボランティアの依頼が減ってしまったり、ボランティア活動が制限されたりする時期が続きました。この影響により学生からは「どのようにボランティアを探せばよいのか分からない」や、ボランティア活動に参加することへの不安の声が聞かれるようになりました。

ボランティア情報センターでは、学生スタッフとの対面での相談や、大学内でのボランティア募集の掲示、活動をしたい学生へのLINEでの情報発信を行っています。

また、長野大学の中で「ボランティア情報センター」の認知度を高めるべく、大学が主催する学生の地域活動報告会（学生サミット）への参加や、独自のボランティア紹介会を開催するなどの活動も行いました。



## ●参加した主なボランティア

## 1. 上田市塩田地区・みんなのしおだ食堂（子ども食堂）、陽だまりキッズ（学習支援）

食事ができるまでの間、参加者の子どもたちと遊びます。子どもたちが安心して遊び、食事をして、人となることができる居場所をめざして活動しています。子ども食堂の活動は上田市の他の地区でも行っています。

陽だまりキッズでは、小・中学生向けの学習支援を行っています。子どもたちの自主学習支援と居場所づくりを目的として活動しています。

## 2. 千曲市

千曲市社会福祉協議会と連携した企画として、子どもや地域の方と長野県の郷土料理である「おやき」をつくる料理教室を開催しました。長野県外出身の学生のアイデアで始まった企画で、企画した学生たちも参加者も楽しく活動しました。



## 活動している学生コメント



西澤紅愛さん  
（社会福祉学部3年）

私が個人でボランティア活動に参加していた時に、さまざまな課題を感じていました。例えば、新型コロナウイルス感染症の影響により学生間の交流が減少したことで、ボランティア当日に参加者同士が初めて顔を合わせることがありました。ボランティアはスタッフ同士の連携が大切になることが多く、初対面だとコミュニケーションがうまくとれず困ることがありました。

また、ボランティア先への交通費が自己負担になることもありました。交通費の問題は解決することが難しく、日常的にボランティア活動に参加していた私にとっては大きな問題でした。

こうした経験から、ボランティア情報センターを立ち上げることにより、学生が「ボランティア活動に参加しやすい環境づくり」に取り組むことになりました。立ち上げは、私と同じような思いを抱えながら活動していた友人と一緒に、教職員の方々の支えがあって実現できました。

友人とはボランティア先での困りごとやボランティアに対する考え方などを日常的に話し合い、お互いに意識を高め合うことができていると感じています。活動をはじめたばかりなので課題はありますが、後輩たちにも活動を継続してもらえるように、ボランティア情報センターの必要性を伝えていきたいです。

# 03

## 上田市と市内5大学が運営 まちなかキャンパスうえだ

### まちなかキャンパスうえだとは？

上田市と市内5大学等（※）が運営する「まちなかキャンパスうえだ（通称「まちキャン」）」は、2016年7月に上田市海野町商店街に設置されました。地域と大学等をつなぐ「連携の窓口」、地域と大学等が連携して地域課題などの解決を図る「連携活動の場」、大学等における研究・教育資源を市民の学びに活かす「学びの場」となっており、高校生、大学生、大学の教員、地域住民、地元企業の方などさまざまな人が集い、交流・活動を通じて地域の賑わいを創出するまちづくりの拠点です。

※長野大学、信州大学、上田女子短期大学、長野県工科短期大学校、筑波大学山岳科学センター

### 長野大学は“まちキャン”でこんな活動をしました！

#### PICKUP/①

##### 学生が「街かど読書会」を企画運営



社会福祉学部の片岡通有教授（教育学）のゼミ生が市民向けの講座として「街かど読書会」を開催しました。本読書会は市民の皆さんと学生と一緒に同じ作品（道徳教材）を読み、感想を発表したり意見交換をしたりするものです。昨年10月には長く読み継がれている「星野君の二壘打」（吉田甲子太郎作）を題材に開催し、20代から50代の16名が参加し、世代や立場を超えてお互いの考えを伝え合いました。まちキャンでは、年間通して市内5大学等が講座を開講しています。

社会福祉学部の片岡通有教授（教育学）のゼミ生が市民向けの講座として「街かど読書会」を開催しました。本読書会は市民の皆さんと学生と一緒に同じ作品（道徳教材）を読み、感想を発表したり意見交換をしたりするものです。昨年10月には長く読み継がれている「星野君の二壘打」（吉田甲子太郎作）を題材に開催し、20代から50代の16名が参加し、世代や立場を超えてお互いの考えを伝え合いました。

#### PICKUP/②

##### 学生がまちキャンの看板を制作



デザインサークル「コトポート」に所属する学生がアクリル絵の具を使って看板を制作しました。同サークルはデザインについて学生同士で学び合い、時には外部からの依頼に応じてロゴやチラシのデザインを行っています。昨年秋には活動で身につけた力を活かして「まちキャンに気軽に入ってみたくなる」看板を作ってくれました。まちキャンは上田駅から徒歩10分ほどの商店街の一角に設置されており、買い物に来た方など様々な人の往来があります。ゼミやサークルで制作した作品や成果報告のポスター展示などの場としても活用されています。

デザインサークル「コトポート」に所属する学生がアクリル絵の具を使って看板を制作しました。同サークルはデザインについて学生同士で学び合い、時には外部からの依頼に応じてロゴやチラシのデザインを行っています。昨年秋には活動で身につけた力を活かして「まちキャンに気軽に入ってみたくなる」看板を作ってくれました。

# 04

## 木育教材 「地域材でつくろう」の開発と実跡

### 木育教室「地域材でつくろう」環境について学ぶゼミが小学校開講！

（※2023年度 信州上田学 地域パートナー連携事業）

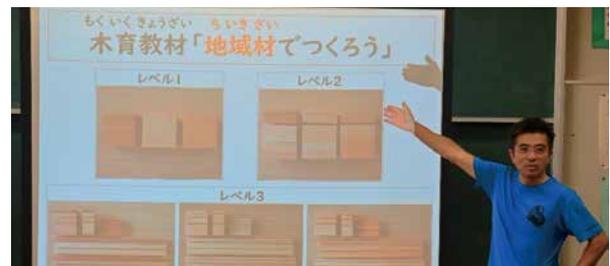
「木育」（材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶための教育活動）は2004年に北海道庁により提唱され、「森林・林業基本計画」（2006年策定）に盛り込まれることで、「木育」の推進が呼びかけられました。森林・林業基本計画（2016年策定）では、2025年までに木材自給率を50%以上まで引き上げるとし、林業を推進していくことが示されました。しかし、小学校の教育課程では、「林業」に関する学びや「木育」が十分に行われていません。

そこで、環境ツーリズム学部の高橋一秋教授（生態学）のゼミでは、さまざまな形と大きさの角材からなる木育教材「地域材でつくろう」を、主に上田地域で生産されたスギ・ヒノキ・カラマツの木材から作製し、小学3年生の教科「図工」の単元「くぎ打ちトントン」の授業を行いました。

授業実践にご協力いただいたのは、上田市立塩田西小学校です。児童は、木材の種類によって、匂いやくぎを打ったときの硬さが違うことを学び、創意工夫にあふれた作品作りを楽しみました。



工作例



小学校で授業を行う環境ツーリズム学部の高橋一秋教授